



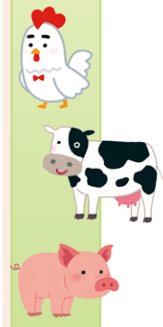
園芸課
小棚木 佑亮

目的に合わせ バランスの良い施肥 をしてみましょう！

作物を育てる際、肥料を上手に使うことで、たくさん収穫できるようになります。

作物・品種・土によって、ちょうどいい肥料の量は違いますので、まずは育ててみて、どのような生育するか知ってから、肥料の量を調整しましょう。今回は、堆肥・土壌改良・基肥・追肥の4つに分けて簡単にポイントを紹介します。

【堆肥（総合的な肥料）】



土を適度に柔らかくし、微量元素を含め様々な栄養が入っており、「総合栄養食品」のような役割があります。

メリットの方が多い堆肥ですが、堆肥が未熟な場合などでは、病害虫を呼ぶことがありますので、注意しましょう。牛糞主体であれば、1㎡あたり1kg前後の範囲で施用し、毎年量を調整しましょう。

土に馴染ませるために、作物を育てる前年の秋に散布することをすすめます。

【土壌改良

（Ca・Mg・P・Si・微量元素等）



一般的な野菜は概ねpH6.0ー6.5が適正範囲です。日本の土壌は元々、pHが低い土が多いので、「苦土石灰」や「ようりん」などを撒いて、栄養とともにpHを調整すること、育ちやすい土に変わっていきます。

すでにpHが適正範囲の圃場については、過剰に肥料を与えてバランスを崩さないように、量を調整することも大切です。

【基肥（N・P・K主体）】

作物に合った量を撒きましょう。トマト、西瓜等の果菜類は、基肥が多すぎると、実のつきが悪くなる場合があるので、多すぎず、少なすぎずの散布量を意識しましょう。

肥料がゆっくり長く効く一発型の肥料も増えていますので、上手に肥料を選びましょう。

【追肥】

一度に多く追肥すると、根が傷み、病害虫を呼びますので、少量に分けましょう。

液肥を与える場合は、濃度は薄い方が根に優しいです。

葉に噴霧する液肥（葉面散布）は、とても早く、確実に効く技術です。

これについても、濃度は少し倍率を薄めにかけることを心がけましょう。

最後に、肥料袋裏の記載欄には、
☆例えば「60〜100kg/10a」と書いている場合、

「6〜10kg/1a」と、

簡単に換算することができます。
間違つて換算して失敗しないように注意して肥料を施用しましょう。

◇お問い合わせ◇

営農経済部 園芸課 0182-2316578

【肥料成分】 N（窒素）、P（リン酸）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）
Mg（マグネシウム）、Si（ケイ酸/ケイ素）